慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	黒死病
Sub Title	The Black Death
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1983
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.76, No.1 (1983. 4) ,p.145- 150
JaLC DOI	10.14991/001.19830401-0145
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19830401-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

黒　死　病

渡　辺　國　廣

経済史のなかの黒死病
賃金論
物価の力学
人口問題

経済史のなかの黒死病

転機として の黒死病　黒死病は長く抑圧されて来た弱者のため，社会的上昇に必要なチャンスを準備した。こうした観点から黒死病に対し，近代の出発点としての地位を授けようというのが，経済史における黒死病研究がめざすところだった。

弱者が社会的上昇を果すには，高賃金を得ることが肝心だろう。黒死病は高賃金を招来するほどに激しい人口減少を生むことにより，弱者が社会的に上昇するチャンスとなった。人口減少の結果である高賃金は，安い労働力を食い物にして来た強者にとり，大きな打撃だったはず。しかし高賃金も，物価を上回わる賃金上昇の産物でなければ，弱者が社会的に上昇するための真のチャンスとして作動しない。押え込みを繰り返すことが必要なまでの賃金上昇が続いたが，一方また，物価も賃金とパラレルな上昇を続けていた。高物価の前に，高賃金，形なしだった。高物価のもとの高賃金は弱者のため，社会的上昇のチャンスたり得ない。高賃金が弱者の社会的上昇のためのチャンスたり得るのは，低物価にもかかわらず，賃金が下落しないという状況の時だった。その時は，黒死病がすでに遠のいた15世紀にはいろうとするころ来た。でも，その時の到来の誘因となったのは，間違いなく，黒死病だった。なぜなら，黒死病による人口減少は，低物価にもかかわらず，高賃金が続くほどに回復困難な人口減少だったからだ。

以上に伝えたのが，本稿のあら筋ということになろう。事実として黒死病は，近代の幕を切って落したというにふさわしく弱者のため，社会的上昇のチャンスたり得たか。本稿は，そういい切るための長い道のりの第一歩ぐらいのものでしかなかった。本稿が指摘するデータの不備は，前途の多難を予告してあまりあろう。

本稿の方法　黒死病は，近代の誕生を許した。なら，黒死病は，近代の誕生にどうかかわって来たか。それに答えたのが，本稿である。本稿では，黒死病を，賃金，物価，人口の組み合わせのなかで考えている。範を Bridbury, A. R., The Black Death,

Economic History Review, 1973, 577-592 に仰いだ。果して賃金，物価，人口のデータは，弱者が社会的上昇を達成するというにふさわしい黒死病理解を可能とするような状況で，残っているか。

黒死病が持ち込んだのは，生産の仕組をそのままに，労働力だけが忽然と消え去るという事態だった。かかる事態は，黒死病によらずとも，起り得よう。今日，その可能性は，とみに高まって来ている。となると，現代の黒死病が誕生を許すのは，一体，どういう近未来なのだろうか。こうした問いかけを，本稿は，はみ出した問いかけとしない。

賃金論

高賃金に，地主戸惑う　14世紀には，この世紀を特色づける前代未聞の飢饉や黒死病が発生した。そうしたなかで，この時代の基礎となる社会制度はひどい打撃を受け，その結果，人口の圧倒的多数が繁栄を見ることになった。

14世紀に端を発した既存の秩序のまれに見る転倒は，人口の減少に起因する。人口の減少は，14世紀を特徴づける一連の飢饉や黒死病の発生によった。飢饉や黒死病の襲来の結果として，人口は大幅に減少した。土地不足が解消するにつれ，土地は著しく価値を失う。地代が下落し，地代の下落によって賃労者は借地経営に引きつけられた。その結果，賃労者はひどく涸渇した。こうして，賃金は上昇する。

14世紀を有名にした広範囲に及ぶ繁栄は，豊富で安い土地に依存していたため，地主階級の犠牲のもとに享受された。地主階級の富は，不足がちで高い土地に依存していた。土地が安くなると，地主経営は崩壊する。なぜなら，地主経営は安い労働を食い物にして来たからである。土地が高い時，労働は安かった。14世紀末には，地主経営の破綻が誰にも明白である。

データは，高賃金を伝えぬ　賃金や物価のデータから見て，人口の減少を信ずることは非常に困難だった。人口の減少を測定する手段として賃金のデータを使用することは，危険である。賃金や物価のデータは，土地や労働の不足を示していない。

14世紀は，地主経営が困難なほど物価の低い時代ではなかった。農産物価格が一時非常に高騰したため，実質賃金は名目賃金ほど上昇していない。

高地代が，地主の支え　14世紀は，高物価の時代だった。14世紀早々に，穀物価格は上昇を示す。消耗品の価格も，同様である。14世紀にはいり，物価高が定着した。飢饉や黒死病に見舞われた14世紀後半の物価上昇は，従前にない。物価ががた落ちしたのは，14世紀も終わりに近いころだった。

地代という形での土地の価値は，その土地の産物の価格を反映している。14世紀の前半には，地代がそう大きく上昇しなかった。でも，契約借地や慣習借地の地代は着実に上昇を続けており，上昇は14世紀後半にはいっても，続いた。物価の上昇とフィットして，地主経営の繁栄はある。

黒死病が襲来した14世紀の後半に，異常なほどの高物価が続いた。高物価が続くさなかにあって，地代も上昇に向かう。14世紀末の地主収入は，14世紀なかばのそれよりさほど低くない。地主は収入を従来の水準に維持できた。

高地代の確証なし　地代は上昇している。といっても，これは，限られた数字から得た結論だった。地代が各地で同時に上昇したといいたいが，各地の状況や条件が違い過ぎ，あるところで起った地代の上昇を，例外と見なければならないほど。地代の上昇を知るのは，困難である。地代の上昇を確認できる数字は，手に入れにくい。

高賃金は，地主の泣き所　地主の収入は黒死病の結果として，目立つほど減らなかった。でも，地主の収入が国富全体のなかで占めるシェアは，従前を上回らない。地主は自分の土地に借地者を迎え入れるため，前よりはるかに不利な条件をのまなければならなかった。また地主は，賃労者，職人，そしてあらゆる専門家，といった使用人たちの仕事に対し，前よりはるかに高く支払わなければならない。黒死病後かなり長い期間にわたって見られた物価高は，たしかに地代を上昇させた。見通しは地主にとり必ずしも明かるいものではなかった。黒死病の結果として，地主の収入は大して減らなかったが，地主の収入により

入手できるものは，黒死病前より多くはなかった。なぜなら，収入と物価は歩調をそろえていなかったからである。

地主は自分の出費を，非常にレベルの低い生活を維持するものに限定できなかった。穀物価格は高く，他の農産物価格も高かった。地主の家族が贅沢したり威厳を保ったりするため必要な多くのものを作る賃労者や職人等が要求する支払は，高い。地主は自分の分け前を増すどころか，黒死病前と同様の取り分が実際かろうじて保証される程度の収入だった。地主の収入を減少させた要因というのが，賃金の問題だった。高賃金であることが，にぶくかつ不完全ながら，伝わって来よう。

高賃金を，見る　土地のない村民たちは，どこかで寝たり，自分で食べ，着なければならない。中世の村落が密猟，盗み，無断借地の犯人であふれる悪の世界でない限り，彼らは住む家や消費物資のため支払う。彼らは日雇に出て，稼ぎ，支払っていた。ほかに，身代りとして夫役に従う日雇がいた。こうした日雇が果す夫役がどれだけのことだったか，知ることはできない。ただ，労働が安い時，村民の多くが一緒に住む使用人を身代りとして，夫役に差し向けていた。

建築業者は，常雇として労働者を抱えている。建築労働者の賃金は，物価の動きとパラレルに，変動していた。建築労働者の場合，物価が上昇すれば，賃金も上昇し，物価が下落すれば，賃金も下落するというのだった。しかし14世紀なかごろには，建築労働者に対し支払われる実質賃金が，減少した。これに反し，出来高仕事の賃金は，まったく逆の傾向を示している。実質賃金が下落した時でも，脱穀や選別に支払われる出来高賃金は，下落しなかった。収穫の作業は地主にとり，重荷に感じられた。

高賃金を，地主は恐れず　飢饉や黒死病が頻発した14世紀を通じ，賃金は上昇した。実に驚くべき上昇だった。たしかに賃金は上昇し，しばしばひどい上昇を示している。黒死病の最初のショック後，14世紀末まで，実質賃金は着実に上昇傾向にあった。

ために，地主経営は黒死病後，黒死病前よりはるかに多くを，賃労者のため支払わなければならない。賃労者に深く依存していた地主経営は賃金上昇のあおりで，得た収入にふさわしい利益を受けることができなかった。しかし地主経営は黒死病後，黒死病前より高い収入を得ていたから，すべての地主経営が苦境にあったというわけではない。賃金が費用の重大な一部となっているため，賃金のことを気にしなければならない地主経営だが，賃金の上昇が利益に深く食い込んでいない地主経営が多かった。地主経営は，黒死病が侵入した直後の障害著しい時期に，繁栄期を迎えることができた。

高賃金は怪しい　賃金の確定は，かなり困難である。加えて，今に残る賃金データの大部分は，建築労働者の賃金データだった。だから，賃金データから結論を引き出す際には，慎重でなければならない。

驚くべき事実は，賃金が物価と同じように上昇し，下落していることだった。高賃金も，高賃金にふさわしい高物価であれば，意味を持たない。事実，実質賃金の上昇はなかった。実質賃金の上昇は，緩慢だった。数字は，高い賃金を驚く声や記録にあふれる事態を，伝えていない。

14世紀の地主経営は困難が多かったが，何とか採算が合う経営だった。ただし，かかる結論にいたるため踏まえたサンプルには，限定があった。14世紀の地主経営の研究がほとんどないので，多くのサンプルを得ることはできない。14世紀の地主経営について発言する際には，控え目であることが望まれよう。

物価の力学

高物価は，黒死病のあおり　14世紀は，楽な世紀ではなかった。14世紀は沈んだ調子で，ひっそりとスタートを切った。

最初の黒死病がイギリスを襲った14世紀なかば近くのころは，生存者に対し難なくたっぷり提供できるほどの収穫があったため，低物価だった。最初の黒死病の直後に起った飢饉や人手不足から，物価は上昇した。とはいえ，物価上昇は，飢饉の結果として14世紀前半に起った物価上昇のレベルを越えるということはなかった。

14世紀なかばを過ぎて間もなくのころ再来した黒死病は，物価を混乱させた。黒死病とリンクして起った物価の上昇は今やルールであり，第三次の黒死病は，物価が14世紀末のピークに向かってじりじり上昇し続ける時に起った。第三次黒死病後の未曾有の豊作によりイギリスが低物価時代を迎えることができたのは，14世紀も終わりに近いころだった。

高物価のデータは，少ない　14世紀に高物価が定着したとの結論は，乏しい数字を踏まえての結論だった。こうした大胆な一般化に対しては，深く疑ってかかる必要があろう。でも，物価上昇の確証がないというわけではない。

高物価で，高賃金へこむ　14世紀のなかばに制定を見た労働者条例を踏まえ地主は，地主経営にとり脅威的な高賃金を法外かつ執拗に要求する賃労者を雇用しなければならない不都合から身を守ることにした。労働者条例の精力的な実施に向かい，地主は最大の配慮を傾けた。

事実，労働者条例を強化しようという試みが，断続的に起っている。こうしたなかで，一揆は激しさを増した。一揆は，長く続いた抑圧の頂点だった。一揆が目的を達したか，不幸にも失敗したかは，問題ではない。14世紀は，地主経営の利益を著しく損うことなく，賃金が上昇した時代だった。なぜなら，物価が賃金と釣り合って上昇したため，賃労者の稼ぎが帳消しになったからである。

一揆は，茶番劇か　一揆の特徴は，激しさがまったくないことだった。控え目が一揆の際立った特徴だった。だから，一揆が終った時，懲罰は大がかりでも，報復的でもなかった。という以上，一揆は無意味な事件として見逃がしていいのか。それとも一揆に対し，わけもわからない重要性を授けるのか。一揆が取るに足りぬにせよ，意味深かったにせよ，一揆が物語るのは，労働者条例を強化しようとする試みに対する激しい憤りだった。

高賃金に，やっと出番が　14世紀が終わりに近づくにつれ，実質賃金は上昇し続け，物価が下落し続けた。低物価にもかかわらず，賃金は下落しなかった。逆に，賃金は上昇を続けたため，地主経営の不運は免がれなかった。地主経営の危機が深まったことは，一つの時代が終わり，それに代る新しい時代が到来したことを意味した。

だが，地主は戦わずしてあきらめることにより，自分の時代を終わらせたくなかった。そのため地主は労働者条例の有効で厳重な実施を，これまでになく激しく要求した。王は一揆が起った責任が法律になく，地主にあることを地主に気づかせようと，地主の要求に答えなかった。重大局面に対し王は，新しい法律とたくみな行政をもって臨み，また王は，職人の動きを徹底的に調査することにより陰謀を摘発する準備があることを明言した。こうしたことを実行する王は，今しつこく政府の援助を願い出た地主の祖先を拒否した王と同列ではない。王と同じく，時代も変わった。時代は，王よりももっと激しく変わった。

14世紀末近くに，物価と賃金の間の均衡が失われ，激しい転換と交替を迎えることになった。広い範囲に及んだ不幸な飢饉の時代が去ったり，またイギリスの社会制度の基礎に致命的な打撃を加えた最初の黒死病から数十年以上たったりした14世紀も終わりに近いころ，時代のさま変わりは明白だった。

低物価の波紋　物価が高い時，生活費の上昇を見込み，労働者条例実施への意欲は弱められた。物価が下落した時だけ地主は，忠臣としての彼の責任と義務から，王や議会が制定した労働者条例の実施のため，懸命になった。14世紀末に近いころは低物価だったため，地主が義務感を取り戻した時期だった。この時期に，地主は労働者条例の実施の必要を，かつてなかったほど感じていた。事実，この時期に，賃金問題をめぐる議会の論争は，クライマックスに達した。またこの時期に，花々しい一揆を生んだ感情的な高まりが始まった。

低物価，高賃金の因　賃金と物価の関係が劇的に変化した結果，地主経営は没落することになった。地主経営の失敗は，賃金と物価の動きのなかに明白であり，また賃金と物価の動きによって説明できる。賃金と物価の関係が15世紀にはいってもしばらくは安定を欠いたことは，人口の回復力をくじいた黒死病の結果だった。

14世紀末に地主経営の衰退は現実となり，地代の低下，空所の発生を落胆する声が高まった。地主の土地はいいなりの条件で，借地者に引き渡された。多くの難儀を切り抜けて来た地主経営だが，今度は切り抜けることができなかった。地主経営は終わりだった。

黒死病は，変革力か　物価の激しい動きから判断し，14世紀はじめの飢饉は，かつてない苦しい天災体験だった。しかしどう見ても飢饉は，人口圧を緩和しなかった。土地が市場に投げ出された時でも，地代は下落しなかった。生存者が借地者となるため労働から身を退いても，賃金は上昇しなかった。土地の生産性は減退せず，土地の人口扶養力は低下しなかった。だから，地主経営は飢饉や黒死病を乗り越え，急速に立ち直ることができた。

地力の著しい低下はない。また黒死病による人口の驚くべき損失は，賃金と物価に対し思ったほどの影響力を持たなかった。となると，黒死病は考えられているほど有害ではなかったということになろうか。

人　口　問　題

過剰人口で，欠落分を補充　最初の黒死病に見舞われた14世紀なかごろには，借地者の半分，場所によりそれ以上が死亡している。しかし空所になった土地はただちに，生存者により埋められた。それほど黒死病前の村は人であふれていた。空いた土地のため借地者を供給するばかりでなく，多くの仕事のために賃労者を供給し，しかも前と変らない条件で供給したならば，村は人であふれていなければならない。

人口の半分を越える死亡者が出た村のケースは，例外的に不幸なケースではない。死亡者の続出により生じた空所は，空所がそれほどひどい状況にない近くの村からの企業心に富んだ借地者により補充された。だから，労働力の損消にもかかわらず，賃金，地代，物価の関係に，目立った変化が起らなかった。

恐るべき人口減少にもかかわらず，社会経済生活に対する黒死病の影響は少ない。黒死病による人口損失はイギリスを弱くも，へこましもしなかった。14世紀なかばに，羊毛の輸出量は減っていない。毛織物輸出は14世紀なかばごろ，まぶしいほどの拡張期にはいっている。残忍で頑強な百年戦争からの回復は，早かった。人口の3分の1もしくは半分の損失により回復不能なくらい弱められた二国だが，共倒れになるような挙に出た。両国とも，最初に起った黒死病の破壊から，一時的に休戦した。両国には，どんな冒険でもやりたい気持でいっぱいの手すきの人たちが大勢いた。これらの人たちが黒死病により欠落したならば，両国は戦争の再開に熱心にならなかったはず。

人口減少期を，人口が減少している時期に置くことはできない。人口減少期は，14世紀も終わりに近いころだった。14世紀のなかごろには，すべてを無力にする荒廃などなかった。何事も起らず，すべてがまったく平常通り運んでいた。

黒死病，中産層を直撃す　黒死病のショックは深かった。黒死病は大きな災難だった。黒死病は飢饉が押しつぶすことができなかった中産層を押しつぶした。飢饉は中産層まで及ばなかった。黒死病は違う。多くの中産層が死んだ。黒死病は広く中産層を襲った。飢饉が国中に蔓延している時でも，議会は停止されなかった。議員は不屈の精神をもって貧者と苦痛をわかち，議会の義務を敢然と遂行した。しかし黒死病が襲来した時，事態は違っていた。議会は開かれず，法律や行政も一時停止された。

中産層の死亡者が多かったり，政府の機能が中断したりしたことは，黒死病が飢饉より致命的だった決定的な証拠だった。データから明白な如く，飢饉は有産層を避けたが，黒死病は有産層を避けなかった。

霊幽人口，イギリスを救う　二度目の黒死病が発生するまでの10年間に，回復は容易だった。前よりチャンスが多くなったので，以前より暮しがよくなり，死ぬ人が減った。二度目の黒死病と対決した人々は，最初の黒死病で生き残った丈夫な母親により10年間育てられ，栄養もいい人たちだった。黒死病の襲来の直後に起った混乱の結果として14世紀のなかば過ぎのころ，物価は上昇した。賃金は物価とパラレルに動いたが，賃金と物価の間のギャップは埋まることがなかった。人口は引き続き減少しているのに，人口の補充は限りなくなされているようである。賃金と物価のデータは，これを裏づけている。

黒死病の破壊力を信ずることは，困難である。なぜなら，労働力の欠損は，予備の労働力から補塡できたからだ。イギリスの農民の半分，また賃労者の半数を，予備の労働力が埋め，そのため，地代，物価，賃金に著しい影響が起らなかった。14世紀はじめの家族構成は，市場と関係なく多くの人たちの食料，衣服，仕事に対し責任を持つことができるほど多人数だった。彼らは広く社会に出て，他のメンバーを楽にする仕事に従い，単に割り当てられた家事手伝に従うというだけではなかった。

幽霊のような人たちの存在が，生産的な仕事に従事する他の人たちを楽にしたとすれば，幽霊のような人たちは，生産組織の重要な一部だった。彼らの労働が生産組織の重要な一部だったら，こうした労働を提供しにくくした人口の極端な損失によって，市場への労働供給は変化し，賃金と物価の関係は安定を欠くようになろう。幽霊のような人たちは，予備軍だった。飢饉や黒死病により人口が打撃を受けた時，彼らは次々と死んで行く人たちの代わりとなったので，市場や土地所有は人口損失により混乱を来たすということはな

かった。

幽霊人口，チャンスに挑戦　黒死病は雨もりする屋根に降ったひどい雨のようなものだった。黒死病の頻発によりイギリスの人的資源はゆるやかだが，酷な消耗を始めた。大災害も，終って片づけば，復興は確実だろう。繰り返し起る災害の場合，消耗がはるかに大きい。

人口の3分の1から2分の1をも損失させた黒死病の確実な回復は，生存者が死亡者に代替し得るような新たな世代を生み出すまではあり得ない。新たな世代は何年もの間，賃金を得ることも，土地を占有することもできないだろう。賃労者や借地者の不足のために，土地と労働の関係は必然的に変化するだろう。14世紀のイギリスは，人口問題の驚くべき危機によって生じたチャンスをつかむことにだけ熱心な若い息子たち，貧乏人や無断居住者でいっぱいだった。

黒死病で，人口圧が解消　黒死病は恐るべき天罰としての評価を得た代りに，経済構造に影響を及ぼしたという評価を失うことになる。14世紀なかばのイギリスには非常に多くの人がいたため，人口の少なくとも3分の1を失っても，土地と労働の関係に変化がなかったとすれば，黒死病が物語るのは，14世紀はじめにイギリス社会が貧困のどん底にあったということだった。また黒死病が物語るのは，14世紀末に起った賃金と物価の猛烈な逆比や，地主が加えた圧迫に対する激しい一揆に見られる人口の損失だった。

14世紀末のイギリス社会を破壊したのは，黒死病だった。黒死病が伝染する場合，都市にだけ見られるような人口の濃密さを要求している。頻発する黒死病は，過剰人口の再現を防いだだけだった。黒死病が農村を全滅させ，農村の人口を死亡させたなら，農村の人口は黒死病が広まるような条件を満たすに十分なほど密度が高くなければならない。黒死病は都市に限定された。黒死病が14世紀においてダイナミックな力を持つとすれば，黒死病が占むべき確たる位置を見出さなければならないのは，黒死病が長く猛威を振った14世紀なかばよりも，14世紀末だった。

浄化機能としての黒死病　見え隠れする群集は，群集が他に及ぼした影響によってだけ，存在がはっきりする。黒死病から伝わって来るのは，労働力が多かったため，生産の収支が低いか，ゼロか，マイナスだったり，また過剰労働力の一掃により生産力が強まり，事実，かなり増したりする経済のサンプルだったのである。

黒死病によって大量死が生じても，イギリスの社会的，経済的関係はまったく変らず，財，サービスの分配や生産が損われるということはなかった。黒死病が有毒だったというよりも，浄化作用をしたほど，14世紀はひどい過剰人口だった。

付　もともと私は本稿を，私が経済学部から担当を命じられている研究会のため私が発刊している渡辺研究会手帖の7として，人口革命論と題し発表する積りだった。本稿によっても自明の如く，渡辺研究会手帖というのは，ごく薄いパンフレットである。その基底となっているのは，研究会で学生と一緒に読み合った文献について学生が私のもとに提出した訳稿だった。かかる成立事情を持つ本稿であっても，私が本稿に見るような主題をひっさげ，本誌に登場するのを意外と思う向きも多いに違いない。それを承知でまかり出たのは，当初私が本誌に予定した原稿が仕上がらず，ためにせっかくの機会をふいにするのもどうかと思ったからである。

理由は，実になさけない。でも，手持ちの原稿から代りとして本稿を選んだについては，それなりの理由がある。それは，今や大きな流れになっている計量経済史に関連し，私なりに感じているところを本稿により示し，見たかったからである。ご覧の通り，外国文献を下敷きにしての発言でしかない。にもかかわらず，計量経済史からはずれた場で西洋経済史を考えている私にとり精いっぱいの発言。しかし有益な一言になっていることを信じての発言だった。といえば，私はみずからの無知をさらけ出したことになろうか。

（経済学部教授）